書

Kyozo Yokota

《『説文解字』序の一節》

2008年　210×52cm

素材：宣紙・油煙墨

作者の言葉

書

横田恭三

一般に、絵画や工芸はわかるが、書道はどれがうまいのか鑑賞してもわからないという人が多い。現代社会において、いまだ書という芸術分野が確立していないからであろうか。いや、中国の歴史をひもとけば、後漢時代にはすでに書を鑑賞する行為が文献に見え、東晋の王羲之に至って書芸術として大きく花開いた。以来その様式が、奈良時代の日本へ伝播し、平安時代には唐様から和様へと日本書道が変遷を遂げ、“かな”という画期的なスタイルを手に入れたではないか。ここを起点としても一千年以上の歴史がある。にもかかわらず「書はわからない」といわれる。一つには、戦後、鑑賞教育をなおざりにしてきたからにほかならない。鑑賞能力の低下によって見えるはずのものが見えず、楽しめるはずのものが楽しめないのである。

近年、ワープロ全盛時代が到来し、毛筆の必要性がますます薄れてきた。このままだと毛筆文化が消滅してしまうのではないかと憂えた人もいた。ところがここ数年、かえって筆文字が見直されているという話を聞く。デジタル化が進んだ社会だからこそ、筆一本で多彩な表現ができるきわめて原始的な行為に、眠っていた感性が揺り動かされるのかもしれない。だとしたら、幸いなことである。

さて、ここに示した作品は、戦国時代の楚国文字（“円転”様式）をベースに独自の解釈を加味して制作したものである。後漢の許慎という文字学者が著した『説文解字』序に記されている文の一節を題材にした。漢字の発生から説きおこし、当時、八歳で小学に入学し、いわゆる六書（指示・象形・形声・会意・仮借・転注）を学んだことが記されている。

鑑賞にあたって①章法（紙面構成）に工夫があるか②書体・書法に一貫性や主張があるか③用筆や運筆に筆力・筆勢が窺えるか④全体が醸し出す印象はどうか⑤書かれた内容に誤字脱字がないか⑥用紙用墨はどうか⑦押されている印章はどうか。など、いろいろな角度から見ていただくとよいと思われる。

釈文：
「及宣王大史籀（ちゅう）著大篆十五篇、與古文或異。至孔子書六經、左丘明述春秋傳、皆以古文。」